明治から未来へ！京都府立図書館の取り組み

柴田　容子
（京都府立図書館）

1. はじめに

京都府立図書館の歴史は長い。明治5（1972）年4月，当館の前身である「集書院」と関わりをもつ「集書会社」設立を民間の発起人が京都府に申請し，認められた[(1)]。文部省が設立した上野の書籍館開館が同年9月であることから，集書院を日本で初めての「公開図書館」という人もいる[(2)(3)]。以後100年余り，府県立図書館としての当館の役割は，時代と共に変化してきた。

府内各地に直営の図書館を開設するなど本を直接府民に届けた時代，市町村による図書館活動が活発になりその支援体制を整えた時代，そして多様で複雑な社会を生きる府民の生涯学習活動を支えるサービスを展開しつつある現在。本稿では，はじめに当館の沿革を紹介し，現在のサービスについて，情報を発信する，情報を届ける，情報と出会う，という観点から報告したい。

2. 京都府立図書館の沿革

京都府によって，集書院が集書会社の南側に開設されたのは明治6（1873）年。集書院の運営に，集書会社が関わっていく。明治15（1882）年，集書院は運営に行き詰まり，いったん閉鎖される[(4)]。

明治23（1890）年，京都府教育会図書館が開館。京都府から北野神社に預けていた集書院の旧蔵書が与えられた。この図書館は，広く公衆に開かれ，公共図書館としての役割を果たした[5]。

明治31（1898）年，京都府教育会図書館の蔵書を引継ぎ，京都御苑内の博覧協会東館を借り，京都府図書館が開館した[6]。

明治36（1903）年，巡回図書館という制度を始めた。府内3か所の尋常小学校に巡回図書館を設け，各400部の図書を置き，4ケ月ごとにその図書を巡回させることで，各図書館で1年間に1,200冊の図書を読めるようにした[7]。

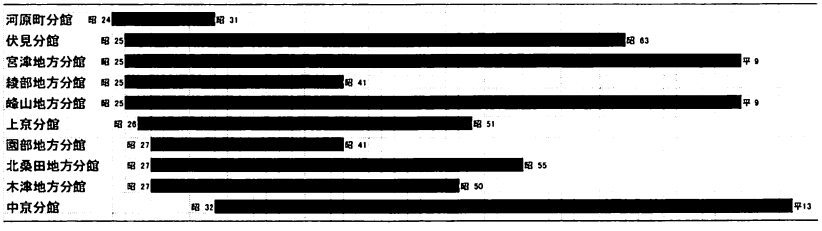
明治38（1905）年，館長湯浅吉郎は，欧米の図書館を視察し，児童図書室を設けた。当時，一般の閲覧は有料であったが，児童図書室は無料で開放され，厳しい規則は設けず，家庭で書物を見たことがない児童に来てもらい，最初は絵に親しみ，のち自然と読書を趣味とするようにしたいと考えた[8]。

明治42（1909）年，現在当館が建つ敷地に移転し，「京都府立京都図書館」として開館した。陳列室を持ち，竹久夢二や岸田劉生の個展も開かれた[9]。

昭和3（1928）年，個人貸出を開始[10]，昭和16（1941）年には，大正14（1925）年に閉鎖した児童室を復活した[11]。

昭和24（1949）年，河原町分館を開設，以後伏見分館，宮津地方分館，と府内各地に分館を開設し，京都府内へ直接サービスを提供し，戦後の各地の読書活動を助けた（第1図参照）[12]。

昭和38（1963）年，知事部局に展示機能を備えた，ロンドンやパリの図書館をイメージした京都府立総合資料館が開設され，府立図書館から約20



第1図　京都府立図書館分館及び設置期間一覧[10]

万冊の蔵書が移管された。総合資料館は，京都や国の文化歴史を語る資料を収集し，一般の研究者に提供するとともに展示を通じて京都の文化の推進に貢献することを理想とした。京都府立図書館は，親しみやすい府民の図書館として総合資料館が行わない個人貸出を行い，地方分館や昭和41（1966）年に始まった自動車文庫を通じて，府民全般へのサービスを展開した[13][14]。

昭和51（1976）年，京都府図書館等連絡協議会が発足[15]，昭和58（1983）年，京都府立図書館は図書館協力貸出を本格実施し，住民により近いところで行われる市町村図書館等の活動をバックアップする役割を担うようになった[16]。市町村の図書館等が住民へのサービスを充実させるに伴い，当館の地方分館はその役割を終え，徐々に閉館されていった。

平成元（1989）年から5年間，図書館資料広域貸出事業を行った。公立図書館未設置町村が，公民館等の読書施設等において資料を必要とするとき，京都府立図書館が資料を長期，大量に貸出すこととした。この事業を利用しようとする町村は，人口規模に応じ，毎年150冊から450冊以上の資料を購入し，当館から貸出する3千から4千冊の資料及び町村年間増加分を運用できる施設を整備する必要があった。また，施設への担当職員の配置，教育委員会に事務担当者を置くことなどを町村教育委員会に求めた。5年間で24町村に12万冊余りの貸出提供を行い，読書施設のなかった町村にも新たに図書室等が設けられ，3つの自治体が図書館を設置した。これにより，京都府内のすべての市町村に担当者がいる図書館及び読書施設等のサービス拠点ができあがった[17][18][19][20]。

平成2（1990）年，連絡協力車事業が本格実施され，府内の市町村図書館及び読書施設に本を届ける仕組みが整い，移動図書館事業（自動車文庫）はその役割を終えた[18]。

平成7（1995）年，昭和61（1986）年に京都府教育委員会が京都府社会教育委員会議に諮問していた「生涯学習社会を展望する京都府の図書館の在り方について（提言）」が提出された。同年1月に発生した阪神淡路大震災により建物が被害を受けていたこともあり，平成9（1997）年から本館を休館の上，建て替えることとなった[21]。

2. 京都府立図書館の運営方針[22]

平成13（2001）年，新京都府立図書館が開館し，京都府内の中核的図書館として，市町村の図書館等を支援することで京都府全域へのサービスを実現し，市町村図書館等との役割分担を踏まえた収集方針に基づき，府民の抱える様々な課題解決を助ける活動を展開することとなった。

運営基本方針	資料収集方針
・府内の図書館サービスの中核的図書館として，図書館資料・情報の総合的な活用を図り，府全体の図書館サービスの充実を図ります。 ・府民の暮らしや地域の発展に役立つ情報を提供し，府民の様々な活動を支援します。 ・情報通信技術を積極的に活用し，情報化の進展に対応した高度な情報サービスを提供します。 ・京都の文化の創造と活性化に寄与するため，関係機関と連携して，京都府立図書館の特色を生かした情報を発信します。	・府民の調査研究や生涯学習を支援する府内の図書館ネットワークの中核的図書館として，その役割を果たすための資料を収集します。 ・府民の調査研究の拠点，及び生涯学習を支援する図書館としてふさわしい資料を収集します。 ・府内図書館ネットワークのセンターとして，府内の市町村図書館活動振興のための資料を収集します。 ・京都府立総合資料館が京都資料，歴史資料，美術資料，官庁資料に重点をおいた収集をしていることに鑑み，両館の機能を踏まえて資料を収集します。

第2図　京都府立図書館の運営基本方針及び資料収集方針

3. 京都府立図書館の蔵書情報発信

平成13（2001）年，新京都府立図書館オープンに伴い，図書雑誌等基本となる蔵書情報を電子化しウェブ上に公開した。その後，教科書や外国語資料等の目録情報を順次電子化し，平成20（2008）年度には，ほぼすべての蔵書情報がインターネットを通じて発信され，府民の調査研究等に活用され

ている。

当館所蔵の教科書コレクションは，京都府が教科書センター見本として保管していたものがベースになっており，戦後昭和期を中心に約2万冊余りを所蔵している。教科書の目録情報作成にあたっては，館内で検討を重ね，その特性に応じ，検定年や教科書番号等に配慮した蔵書情報を提供することとした[23]。目録情報の特性とあわせて，「自分が使っていた教科書を調べるには」といった探し方に関する情報や，教科書を調べる際の助けになる参考図書・ウェブ情報も提供している。教材研究のため，あるいは，自分の学生時代を振り返るためなど，様々な目的で利用されている。毎年京都教育大学生が公立学校等訪問研究のひとつとして当館を訪れ，教材研究を行っている。

外国語資料の目録情報は，すべての蔵書情報をウェブ上で公開することを目標に電子化を行った。平成20（2008）年度，1万7千冊余りの外国語資料を，国立情報学研究所の目録所在情報データベースに登録の上，当館蔵書情報を作成した。そのうち1割強が大学図書館等の目録所在情報が存在しない資料だった。貴重な資料であっても，言語の壁を越えられず，目録情報の作成が難しかった漢籍翻刻資料「叢書集成初編」やエスペラント語資料等の目録情報も電子化した。与えられた条件下での電子化作業で不十分な点もあるが，ほぼすべての資料がウェブ上で検索できるようになり，様々な研究テーマを持つ方々が必要な資料を簡単に見つけられるようになった。展覧会へ出品されたり，学術研究に利用されたりしている[24]。

現在日本語図書の目録情報作成において，民間が作成した書誌データを活用している。京都に関する図書については，固有名詞を既存のデータに書き加えたり，京都府内地理区分という京都府内を地域別に探すことができる区分情報を付与したりしている。京都府内地理区分は，京都府立総合資料館が独自に作成した区分で，当館もこの区分情報を活用している。また，京都関係の情報が一般書の中にあるときは，目録情報に京都関係記事としてその情報を追記し，府民の調査研究に役立つよう工夫している。

京都府立図書館ではまた，所蔵情報をテーマ別にまとめたブックリストを作成している。ブックリストは，各作成担当者が知識とアイディアを凝縮しA4版1枚の表裏にまとめたもので，構成に工夫を凝らし，目を惹くデザインに仕上げている。目を惹くデザインへの仕上げは，職員が自発的に行って

いるもので，ブックリストを手に取ってみたくなる，という効果があると思われる。このブックリストは，当館ホームページでも提供している[25]。

平成25（2013）年度からは，ホームページでの図書紹介を定期的に始めた[26]。現在の社会状況を考慮して，140文字程度の短文で気楽に読めるものを発信している。これは，府民の知的好奇心に働きかけるだけでなく，発信側の知識の向上と情報の共有に役立つものと考える。

4. 情報を届ける京都府立図書館

京都府は，北は日本海，南は奈良県に接する南北に長い立地となっている。来館が難しい府民も多くおられ，従来は，巡回文庫や地方分館を設け，京都府立図書館が各地で直接サービスを展開してきた。現在は，当館に直接来館が難しい府民が利用しやすい地域の市町村図書館等を支援することで，間接的なサービス展開を行っている。

京都府立図書館の資料は，市町村図書館等から要求を受け，当館が毎週運行している連絡協力車で各図書館等に届けられる。市町村図書館等相互の貸借も，この連絡協力車で行うことができる。平成21（2009）年度には，国立国会図書館関西館との協議が整い，府立図書館または市町村図書館が関西館所蔵図書を貸出・返却する際に連絡協力車を利用できるようになった。なお，平成25（2013）年度の当館から市町村図書館等への貸出冊数は約2万冊，市町村図書館等相互の貸借冊数は約2万6千冊だった。

市町村図書館等は，求める図書が当館になく，市町村図書館相互での貸借が難しい場合は，市町村リクエストという形で当館に購入依頼することができる。市町村から要望のあった図書については，対応可能な資料であれば原則として当館で購入し，提供している。

図書物流のバックボーンとなるのが，京都府図書館総合目録ネットワーク（通称K-libネット）である。ウェブ上で，京都府内にある市町村図書館等の所蔵資料を一度に検索できる総合目録を公開している。府民は，府内各地の図書館等にある図書情報を知ることができる。住民の依頼を受けた図書館等は，物流が確保されているため，運搬費の心配をせずに借受依頼できる。

図書館間の相互貸借や連絡協力車の運行等も，K-libネットで管理されており，K-libネット参加館だけが使える機能となっている。協力レファレンスというシステムもあり，住民からの調査・相談に対して自館の資料で対応できなかった場合，参加館に対し問い合わせることができる。質問を見た参加館は，それぞれ調査を行い，同じくネットワークを通じて質問館に知らせることができる。なお，前述の市町村リクエストもK-libネットで処理できる。K-libネットには参加館同士の連絡に使えるメッセージ機能もある。

京都府立図書館では，市町村図書館等に対する研修も行っている。初任者研修・レファレンス初級研修・レファレンス中級研修のほか，市町村図書館等に地理的に近いところで実施する通称出前研修を行っている。同じ内容の研修を京都府北部・中部・南部の3か所で1年に3テーマ実施している。

このほか，市町村や市町村図書館等が読書団体や小中学校での読書活動を支援するため必要な図書をまとまって借りることができる貸出文庫や学校支援セットを用意している。学校支援セットは，あらかじめいくつかのテーマを設定し，用意しておいた図書をセット単位で貸出するものである。

近年は，京都府立高等学校へのサービスにも力を入れている。府内市町村図書館等の協力も頂き，府立高校が必要とする当館所蔵図書を連絡協力車で直接あるいは最寄りの市町村図書館等まで届けている。また，府立高校に対しても学校支援セットを用意している。学校支援セット貸出は，平成20（2008）年度から開始し，現在では小中高あわせて年間約1万冊の貸出まで成長している。京都府立図書館での調べ学習の受入も行っている。

5. 情報と出会う京都府立図書館

京都府立図書館は，現在3フロアで運営している。

2階閲覧室は，マルチメディア閲覧室として，データベースや映像資料等の非図書資料を提供するフロアになっている。1階閲覧室は，外部から入館してすぐのフロアになり，貸出返却等の手続きを行うフロアとなっている。地階閲覧室が最も多くの図書を並べた一番大きな閲覧室となっている。

地階カウンターでは，複写，書庫資料請求，調査相談等を受け付けてい

る。ここでは貸出返却はしないので，大きな調査相談用カウンターともみなせる。3, 4名の職員が，利用者の情報要求に対応している。4脚の利用者用の椅子があり，腰をかけ落ち着いた雰囲気で申請書を記入したり，質問・相談ができる。必ず1名中堅からベテランの職員を配置するよう努めてきた。すぐ答えられるような質問から複雑な質問までカウンター配置の職員全員が対応し，助け合うなどしながら，利用者の情報要求に対応している。

利用者からの質問や相談は様々で広範囲に渡っており，ひとことで表すことは難しい。学生や研究者，在野で研究を続けておられる方からの質問もあれば，日常生活の中で必要になった情報を求めて来られる方もいる。相続，訴訟，医療，転職，雇用，規格といった情報が至急必要となり来館される方もおられる。資料を探すお手伝いをさせて頂いているとはいえ，利用者から知的好奇心を刺激され，教えられることもあり，カウンターは，お互いに学び合いながら，成長していく場といったところだろうか。

こういった様々な質問に答えるために必要な前提として，質問に応えられる資料を準備しておく日々の活動は重要だ。当館では，資料選定担当者を郷土・総記，哲学・歴史・社会，科学・工学・産業，芸術・語学・文学の4グループに分け，日常的に出版情報等に目を通している。当館は，市町村図書館等では揃えにくい本を収集している。当館が立地する京都市内には京都市の各区図書館も存在するが，住民に近いところでサービス提供している京都市の各区図書館とは，閲覧室の蔵書構成に違いがあり，住民は，ニーズにより両館を使い分けているように見受けられる。

こうして収集した図書は，閲覧室に一定のルールに基づいて並べられている。京都府立図書館は立地による建築上の制約もあり，閲覧室面積は，府県立図書館としてあまり広いと言えない。目的の本が決まっている場合は書庫に本がある確率が高くなり，使いにくいという印象を持たれることもある。ただ，新しい情報が欲しいという場合は，閲覧室に比較的新しい本を厳選して並べているので，目的にあった情報が載っている図書を直接探し出すのに適している。利用者からの質問を受け，職員自身も閲覧室の書架から直接本を選んで提供することも多い。また，利用者自身が本の立ち並ぶ書架を眺め，本との出会いを楽しんでいるかの光景に出くわすこともある。

館内には，第1表のような本との出会いを楽しめるコーナーを用意している。

第1表　各種コーナー

コーナー名	概　　要
紫式部と源氏物語のコーナー	紫式部と源氏物語に関する図書を重点的に収集し，その一部を配架 源氏物語を知るブックリストも提供
小展示コーナー	時期に応じたテーマや京都に関するテーマ等を当館所蔵資料を使って展示 関連図書コーナーやブックリストも提供
京都案内本コーナー	京都府立図書館が立地する岡崎地区周辺や京都を知ることができる本を配架 いつでも見て頂けるよう，2部目を館内閲覧図書として用意
美術館特設コーナー	京都府立図書館の近隣施設である京都国立近代美術館と京都市美術館で開催された展覧会図録を過去10年ほど配架 いつでも見て頂けるよう，原則として2部目を館内閲覧図書として用意
地下特設コーナー	時期に応じたテーマや関連機関と連携したテーマなどに関する図書を配架 ブックリストも提供
ミニコーナー	1ケ月以内の短い期間で，時事の話題に応じた図書を配架

また，平成25年度は，図書や情報に出会える機会として，第2表のような催しを行った。近年，大学や類縁機関，周辺施設等との連携事業が増えている。そういった事業は，従来の図書館職員の発想では生まれないものもあり，新しい知が産まれる場として図書館が活用されていると考えられる。

第2表　平成25年度実施事業等

事　業　名	概　　要
館内見学会	毎月第3水曜日実施 「京都学生祭典」「時代祭」時にも臨時開催
図書館活用講座	図書館の使い方や情報の探し方に関する講座
パネル展示「図書館いまむかし」	国立国会図書館関西館で実施された関西館10周年記念展示より抜粋，編集
パネル展示「図書館で，京都のええトコ再発見！」	京都府内市町村図書館等の特色とその地域の観光情報等を併せて紹介 地域の観光団体等からのポスターやパンフレットを展示
「種田山頭火の俳句から発想した絵本」作品展示	京都市立芸術大学との連携事業
小説からの発想作品展示	京都市立芸術大学との連携事業
オリジナルブックカバー及びしおりの配布	京都市立芸術大学との連携事業
京都市立芸術大学@KCUA（アクア）展覧会連携ブックリスト	アクア展覧会出品作品創作に影響を受けた本など関連するブックリストをアクアと共に作成
「研究者の本棚」	「京都大学アカデミックデイ2013」に協力し，研究者からのおすすめ本のコーナーを設置
本を楽しむ，科学と遊ぶワークショップ	井戸端サイエンス工房と共催 参加者が研究者の話を聞き，話し合い，テーマにあった本を見つけ，語り合うワークショップ
NHK　Eテレ「考えるカラス」連動ワークショップ	科学の考え方を図書館で学ぶワークショップ 京都大学及び滋賀大学の研究グループなどと連携
府民講演会「新島八重さんの入門講座」	NHK大河ドラマ及び京都文化博物館特別展に併せて実施
古典の日・読書記念講演会「皇州の喉口」	名所図会の誕生と京都府立図書館がある東山地域の紹介
府民講演会「胃がん・大腸がんの予防を目指して」	京都府立医科大学附属図書館と連携 渡邊能行附属図書館長による講演会

6. 京都府内図書館・読書施設等の状況[27][28]

政令指定都市である京都市は，平成22年度国勢調査によると，人口約147万人で京都府人口約264万人のうち，およそ半分強を占める。昭和56（1981）年に京都市社会教育会館及び分館を下京図書館はじめ地区図書館とし，新たに中央図書館を開館した[29]。その後，各区図書館が開館し，現在では，子育てに関する専門書や絵本を揃えた「こどもみらい館子育て図書館」やレファレンスに力を入れた右京中央図書館等，特色ある図書館も活動している。京都府立図書館にはない児童向けコーナーが各区にあり，市民に近いところにある図書館としてサービス展開している。赤ちゃんから中学生まで6つの世代別におすすめの本をまとめた「本のもり」を作成し，このリストは，大学の授業で紹介されるなど人気が高いようだ。小中学校へ出向いての図書の貸出返却や中学生ビブリオバトルの実施等幅広く活動している。地域の住民とともにユニークな取組みを展開している地区図書館もあり，岩倉図書館では，英語によるゲームや読み聞かせなどを行う英語タイムを行っている。東山図書館では，「東山文学散歩」という地図の作成や町歩きなどを行っている。

京都市の次に人口の多い市は，宇治市で約19万人，続いて10市が人口5万人から10万人以下の自治体である。昭和40年代から60年代はじめにかけ，各自治体において新たに図書館が開設あるいは新館再整備されるなど，京都府内で中心的な役割を果たす人口規模の自治体の図書館がでそろった。この人口規模の図書館をはじめ，京都府南部の図書館・読書施設等は，京都府南部図書館等連絡協議会を組織し，雑誌の分担保存や研修会を行うなど独自に活動を展開している。舞鶴市や福知山市の図書館は，明治から大正にかけて開設され，長く住民サービスに寄与してきた。福知山市は，平成26（2014）年6月21日，新館開館した。兵庫県を含む三丹地域への貸出を行っている。

続いて8市町が人口1万から4万までの自治体である。大正11（1922）年に設立された宮津市図書館から，平成13（2001）年設立の与謝野町立図書館（旧岩滝町立図書館）まで，歴史にそれぞれの違いはあるが，地域の特性

や状況下，工夫を凝らした活動を展開している。この人口規模の図書館・読書施設では，フットワーク軽く地域に密着した活動を展開し，子どもたちの興味を引く取組みをしたり，学校へ出向いて読み聞かせをしたりしている。

最後に人口1万人以下の町村が6町村ある。スタッフの方々のお話しをお聞きすると，住民に近いところで，生活の中にある図書館・読書施設としてサービス展開していることがわかる。利用者と家族のようなつながりをもたれていると感じられることもある。2自治体が図書館を設置している。

7. 終わりに

現在，京都府立図書館では，サービス計画[30]を策定し，順次実施しているところである。府内の市町村図書館等との連携，学校・大学等の教育機関や立地している京都市岡崎地区との連携等，様々なつながりのなかで，当館は活動している。現在進行中の，類縁機関である京都府立総合資料館の新館開館，近隣施設であるロームシアター京都（京都会館）のリニューアルなどから刺激を受け，更なる発展を遂げ，よりよい府民サービスにつなげていきたい。

注記・引用文献

(1)　京都府立総合資料館『京都府百年の教育 5 教育編』京都府，1972, 289頁
(2)　京都府『京都府誌 上』名著出版，1974, 470頁
(3)　小野則秋『日本図書館史』蘭書房，1952, 244頁
(4)　『京都府立京都図書館沿革誌』［京都府立京都図書館］，［1944］，7–18頁
(5)　同，18–20頁
(6)　同，20–21頁
(7)　同，22頁
(8)　同，24–27頁
(9)　『京都府立図書館「岡崎」100周年記念』京都府立図書館，2009, 2頁
(10)　上記(9) 3頁
(11)　『京都府中央図書館報』74–75, 1941年

(12)『分館の現状および将来』京都府立図書館，1956, 1–5頁
(13)『総合資料館10年のあゆみ』京都府立総合資料館，1973, 1–5頁
(14)『事業報告　昭和42年度』京都府立図書館，1968, 3–7, 12–15頁
(15)「京都府立図書館等連絡協議会設立さる」『図書館だより　京都府立図書館報』17, 1976年，3頁
(16)「“図書館協力貸出”発足」『[京都府図書館等連絡協議会] 会報』1, 1983年，3頁
(17)「「図書館資料広域貸出事業」実施要項」1989
(18)小山雄一「府県立図書館の経営」『同志社大学図書館学年報』28, 2002年, 4–17頁
(19)「進む・府立図書館の市町村連携」『図書館きょうと』36, 1993年
(20)「図書館活動広域振興事業の実施について」『[京都府図書館等連絡協議会] 会報』21, 1990年，4頁
(21)『生涯学習社会を展望する京都府の図書館の在り方について（提言）』京都府社会教育委員会議，1995
(22)『事業概要　平成24年度のまとめ』京都府立図書館，2013, 18頁
(23)「教科書目録案内」，京都府立図書館，http://www.library.pref.kyoto.jp/text/textindex.html, 2014年7月7日参照
(24)「反貧困の祖　幻の原稿　米経済学者R・コモンズ　京都府立図書館に世界恐慌　影響くっきり」『毎日新聞　大阪版　夕刊』2013年10月3日，10頁
(25)「テーマ別所蔵資料紹介」，京都府立図書館，http://www.library.pref.kyoto.jp/honlist.html, 2014年7月7日参照
(26)「図書紹介」，京都府立図書館，http://www.library.pref.kyoto.jp/book/new_book.html, 2014年7月7日参照
(27)「平成24年度京都府統計書」，京都府，http://www.pref.kyoto.jp/tokei/yearly/tokeisyo/tokeisyotop.html, 2014年7月28日参照
(28)『京都府の公共図書館　平成4年版』京都府立図書館，1993, 40頁
(29)「京都市図書館のあゆみ（年表）」，京都市図書館，http://www2.kyotocitylib.jp/?page_id=234, 2014年7月28日参照
(30)「京都府立図書館サービス計画　平成24年8月」，京都府立図書館，http://www.library.pref.kyoto.jp/pdf/service_plan.pdf, 2014年7月28日参照